

## 大学入試を生涯学習という観点から考える



講演する前平教授。

学校教育と生涯学習の違いを際立たせて比較しながら、  
学校教育が万能でないことをにじませていた

京都大学が東京・品川の「京大東京オフィス」で開く連続講座「東京で学ぶ 京大の知」(朝日新聞社後援)のシリーズ10「教育を考える」。2月6日に第1回の講演があり、教育学研究科長の前平泰志教授が「大学入試を生涯学習という観点から考える」と題して、一見ミスマッチなふたつの事象から浮かぶ「学びの本質」について語った。

### ■ノーベル医学生理学賞のガードン教授の成績は生物がビリだった

京都大学の山中伸弥教授が昨年、iPS細胞の研究でノーベル医学生理学賞を受賞したことは記憶に新しい。このとき共同受賞したのが、英国ケンブリッジ大学のジョン・ガードン教授。79歳での栄光だった。

前平泰志教授は、スライドで、1949年夏、英国の名門イートン校に通っていたガードン氏の通知表を見せた。共同通信が報じたもので、そこには、こう書かれていた。

「満足するにはほど遠く、(将来は)科学者を目指すと承知しているが、ばかげた考えだ。本人にとっても教える側にとっても完全な時間の無駄」

この年のガードン氏の生物の成績は250人中最下位だったという。

「このことは何を示しているのでしょうか？ 『ガードン氏はその後発奮して、がんばったなあ』と解釈できるかもしれませんが、私の解釈は違います。『学校の評価は間違えることがある。未来を予測することはできない』というものです」

#### ■ 学校で教えてくれないものは何？

前平教授によると、誰もが教育について語れる。教育を受けているからだ。

「ただ、おおかたの人が、教育＝学校教育と思っています。『今の教育はなっていない』と言うときには、たいてい学校教育を想定しています」

しかし、生涯学習は学校教育とは違う。「生涯学習は『教育は、学校の先生が独占して教えるものではない。学校だけで行うものでもない』という考え方に立っています」

では、生涯学習とは何か。それを考える糸口として、前平教授は、学生たちへの定番の質問を披露した。

「学校で教えてくれないものは何でしょう？」

これは学生にとっては難しい問いかけだという。「なぜなら、どこにも書かれていないからです」。困った学生たちは自分の頭で考え、「恋愛」「犯罪」「お金のもうけ方」などと挙げてくる。前平教授はどれも面白い答えだと認めたとうえで、この質問の狙いを明かした。

「学校で教えてくれないこと、学べないことがたくさんあるんだ、ということを知ってほしいのです」

#### ■ 時間と空間の制約なし

学校で教えてくれることは、学習指導要領によってあらかじめ決められている。それは、やさしいものから難しいものへと段階的、体系的に学ぶように知識が配列されている。恋愛のように、個別具体的な話は教えられない。

「学校では、具体的なもの、経験から生ずるもの、自分の内部から湧き起こってくるもの、は教科から排除されています。学校は、教える側に都合が良い。何をいつどこまで教えるかは先生の側が決められる。学ぶ側の意思や動機を犠牲にすることで、成り立っています。そこからは、自立した判断能力や共感能力が育ちにくいでしょう」

それなら、生涯学習はどうなのか。学校教育と比べると、学ぶ時間と空間の制約がない。

「誰でも、いつでも、どこでも、誰からでも学べる。それが生涯学習の特徴です」

生涯学習には一般的に四つのポイントがある。

(1) 知るために学ぶ(2) するために学ぶ(3) ともに生きるために学ぶ(4) 生きるために学ぶ。前平教授はそこにもうひとつ加えた。

「私は生涯学習のもっとも大事なポイントは、『学ぶことを学ぶ』ということだと思っています」

#### ■ヘレン・ケラーが鶴見俊輔さんに伝えた言葉

前平教授は、哲学者の鶴見俊輔さんの著書『教育再定義の試み』にある言葉を紹介した。英語の「learn」と「unlearn」。「unlearn」は「学ばない」ではなく、「学んだことを捨てること」。

「鶴見さんは『学びほぐす』という言い方をしています。いったん自分が学んだ知識を捨てたつもりになり、何度でも学び直すという意味です。これは、生涯学習に通じる言葉です」

鶴見さんは米国のハーバード大学に留学していた若き日、ヘレン・ケラーと会った。ヘレン・ケラーは「自分はハーバード大学の近くの女子大でたくさんのことを学んだ。けれど、たくさんのもともunlearnした」といった趣旨の話をしたという。

「鶴見さんはこの言葉を、『型通りにセーターを編み、ほどいて自分の体に合わせてもう一度編み直す』というイメージで捉えています。私たちは、このunlearnを実践することで、人生を何倍もおいしく生きることができます」

## ■最後は自分で評価する

こうした生涯学習の視点からは、大学入試をどう位置付けたらいいのか。

前平教授は、入学試験の特徴として、(1)制限時間がある(2)答えがある(3)1人で答えなければならない(4)問題作成者の意図を読み取らねばならない、などの点を挙げた。

ところが(4)はとても難しく、前平教授自身、自分の書いた文章が使われた予備校の問題を解いたが、ひとつも正解できなかった。

そんな大学入試が一気に変わることは、大学に定員がある限りは難しいという。

「五感全体を使うような試験だとか、多様な選抜の仕方はいくらありますが、やはりすぐには実現しにくい。入試は、生涯にわたって学ぶ人にとってはひとつの節目。たいしたことであるけれども、たいしたことではない。それぐらいの気持ちでいい」

前平教授は最後に、生涯学習への心構えについて語った。

「自分のペースにしたがって学習機会を選びながら、何をいつどこまで学ぶかを自分で設計する。結果よりも、学び続けるプロセスを大事にする。最終的には、他人の評価よりも自分の評価を大切にすることがコツです」

冒頭で触れたガードン教授も、もしも通知表の評価にしたがって科学への道をあきらめていたら、ノーベル賞を受賞することも、賞に値する研究が世に出ることもなかった。



熱心な聴衆たち。質問も多く出た。男性から「学びほぐすことを、教育現場で政策としてどう具体化できるのか」という質問が出ると、前平教授は「自分で考えてください。それが自己教育です」と言いつつも「学校をもっと開くことができるのでは」とヒントを出した